

哲学エッセイ

創造者

服従の彼方へ

マクシム・ステパネンコ

良心、自由、そして新しい世界の可能性について

日本語版初版

オタワ・2026

創造者

服従の彼方へ

良心、自由、そして新しい世界の可能性について

マクシム・ステパネンコ

哲学エッセイ・オタワ・2026

目次

本書について

疑う権利

序文　すべての始まりとなった疑い

第一章　最初の矢が放たれる前に

第二章　奇跡を起こせる存在

第三章　神殿の戸口の傲慢

あらかじめ判決の決まっていない世界

第四章　宇宙にプラスの符号はない

第五章　創り手の権利

第六章　源へ還る光線

第七章　沈黙が語りはじめるとき

世界の工房

第八章　ふつうの人の工房

第九章　ピラミッドのあとで

第十章　形の滅び、物質の生

第十一章　手放すことのできる力

第十二章　宇宙の三つの設計図

創られたものの自由

第十三章　問いを手放さない者

エピローグ　頂ではなく、始まり

あとがき　この本のどこまでが仮説なのか

さらに読むための道しるべ

本を閉じたあとで――問いの工房

実践　この本の言葉さえ鵜呑みにしない
開かれたままの十二の問い
創造者のための個人倫理の草稿
最後のページ　未完の地図
著者について
奥付

本書について

善とは何か、悪とは何かを決める権利は、誰にあるのか。そして、ひとつの世界を創りだす力は、そこに住む者たちの生を思うままにする権利までも与えるのだろうか。

すべては、上から下された命令を果たさねばならない立場に置かれた、ひとりの人間の疑いから始まる。『バガヴァッド・ギーター』や古代の物語に向けた問いを出発点に、話は権力へ、良心へ、意識の本性へ、そして創造者たちがもはや互いの上に立つことなく、ともに在ることを学んでいく、ありうべき未来へと進んでいく。

『創造者――服従の彼方へ』は、自由と責任、そして確信の代償をめぐる哲学エッセイである。宗教の教義を説く書物でもなければ、宇宙の成り立ちを証明しようとする試みでもない。これは、考えることへの、美しい真理にさえ異を唱えることへの、そして従順からではなく他者の声を聴きとる力から始まる道徳を探すことへの誘いである。

巻末には、実践と、ひとりで考えるための問いを収めた。

疑う権利

序文　すべての始まりとなった疑い

夕暮れどき、部屋は広く見える。テーブルはもう片づけられ、外では隣家の窓明かりがつぎつぎに消えていく。それでも、ひとつの考えだけがどうしても静まろうとしない。もし誰かが宇宙をまるごと創造できるのなら、私はその者を善なる存在とみなさなければならないのだろうか。この問いが居心地が悪いのは、答えることが禁じられているからではない。私たちが未知のものから身を守るために使い慣れてきた言葉――「神聖な」「より高い」「定められた」「ねばならない」――を、ことごとく見直させるからである。

この議論にのぞむにあたって、ふつうの人間は、宇宙の外にある実験室も、永遠の記録庫への出入りも持ちあわせていない。あるのは生きてきた経験と、推論する力と、他人の証言――そして、美しい説明を証明と取り違えてしまうかもしれないという、落ち着かない可能性だけだ。

想像してみよう。ある者がひとりの人間のもとにやって来て、こう告げる。「全体を救うためには、部分を犠牲にしなければならない」。人間は、なぜなのかと説明を求める。見せられるのは世界地図であり、戦争の歴史であり、古い書物であり、最後には宇宙の深淵を映す恐ろしい幻である。「これでわかったか」と来訪者は尋ねる。だが、もっとも難しい問いが立ちあがるのは、そのあとになってからだ。現実を支配する力が、道徳的な決定を下す権能まで与えると、どうして私たちにわかるのか。

この考察に、都合のよい勝者は現れない。ここで神が有罪とされ、人間が正しいと宣告されることはない。試みるのは、裁判という手続きそのものを解きほぐすことである。最終的な判決を下す権利は誰にあるのか、その者はどんな証拠を手にしているのか、そして発言

を許されなかった者は、誤りの代償としてどれほどのものを払わされるのか。

はじめに置かなければならないのは、古代のある場面だ。武器を手にした男の目に、ふいに敵が映らなくなり、ふたたび人間が見えてくる場面である。

問う権利は、ありうるどんな創り手から受けとった贈り物のなかでも、もっとも大切なものかもしれない。

このエッセイは、長い対話から生まれた。対話はインドの叙事詩のいくつかの挿話から始まり、神の命令という問題へ、さらに善と悪の成り立ちへ、絶対者の本性へと移り、最後に、意識をもつ存在はただ創られただけのものではなく、自らも少しずつ創造者になりつつあるという仮説にたどりついた。神の存在も、霊的な進化も、複数の宇宙も、ここで証明しようとするつもりはない。これは、どの結論が私たちの前提から本当に導かれ、どの結論を私たちがただ自明とみなすことに慣れてしまっているにすぎないのかを確かめる探究である。

その中心にある考えは単純で、しかも居心地が悪い。たとえ存在が何者かによって創られたのだとしても、創られたものの自由が創り手の誤りである必要はない。おそらくは、その自由こそが創造の意味をなしている。

その途上で、私たちは自分自身の美しい結論を何度か手放さなければならないだろう。善は創造と同じものではないとわかるだろう。破壊は悪と同じものではない。力は道徳的な権威と同じものではない。そして霊的な成熟は、玉座へと近づいていく歩みには似ていないのかもしれない。

こうした後退をすべて経たうえで、なお創造者の像が浮かびあがるとしたら、それはおそらく、創ることができるだけでなく、創ったものを手放すこともできる存在だろう。

第一章　最初の矢が放たれる前に

戦いの前には、抽象的なものは何ひとつない。馬の鼻孔は湿り、掲げられた槍の向こうで見知った顔が動いている。遠くから見れば、ふたつの軍勢は二本の暗い帯のようだが、近づくと帯はひとりひとりの人間にほどけていく。老人が革帯を直し、少年がはじめて武器を握り、誰かが家のことを思っている。叙事詩に、こうした細部をルポルタージュのように描いた独立の場面があるわけではない。それらはただ、「戦争」という抽象的な言葉がふだん覆い隠しているものを思い描く助けになるだけだ。

だからこそ、アルジュナの抵抗はこれほど重い意味をもつ。戦車がまだ両軍のあいだの持ち場へと進んでいるあいだは、「正義」「王国」「義務」といった言葉で議論を続けることができる。だが顔が見えたとたん、別の言語が現れる――具体的な喪失の言語である。

『マハーバーラタ』のなかで、アルジュナはふたつの軍勢のあいだに立ち、矢を射ることを拒む。片側には親族や師や友がおり、反対側にも同じ人々が、ただ別のかたちで彼と結ばれて並んでいる。戦争は正義の回復を約束するが、その代価は、彼が名前を知っている人々の身体である。彼のためらいは、弱さ、執着、霊的な決意の欠如と呼ばれるのが通例だ。けれども、問いを逆さに立てることもできる。アルジュナの疑いこそが、この挿話全体でもっとも重要な道徳的達成だとしたら、どうだろうか。

疑うことは、義務を否定することではない。それは、「義務」という言葉が、それだけで行為の帰結を帳消しにすることはできない、という意味である。正義を守りながら、同時に人を殺したくないと願うことはできる。抵抗が必要だと認めつつ、なお、ほかならぬ戦争こそが抵抗に必要な手段であることの証明を求めることもできる。

とはいえ、この英雄を、古代の神に時代遅れの道徳を押しつけられる現代の平和主義者に仕立てるのは、あまりにたやすい。『バガヴァッド・ギーター』が語るのは、戦争の犠牲者のことだけではない。行為を控えることもまた害をもたらすとき、人はどう行動すべきかを、それは問うのである。アルジュナは、誰にも手を出さずにおこうと決めただけの、民間の傍観者ではない。彼は戦士であり、政治的な紛争の当事者であり、ほかの人々の運命がかかった責務を負う者だ。戦いを拒むことは、権力を、際限なくそれを振るう用意のある者の手に渡すことにもなりうる。

私たちは本物の悲劇のなかにいる。ふたつの道徳的な要請がぶつかりあい、どんな公式も、その両方を無傷のまま守ることはできない。正義を守れ。人を手段にするな。ときに、ふたつの要請を完全に満たすことはできない。しかし、両者が衝突するからといって、どちらか一方を永遠に取り消してよいことにはならない。

目的が高くても、手段が必要であることを証明する義務は消えない。

『バガヴァッド・ギーター』のクリシュナは、アルジュナの前に別の展望を開いてみせる。身体の生は移ろいゆくものであり、真の自己は滅ぼされえない。報いへの執着なしに行為すべきである。戦士たちの運命は、より大きな宇宙の秩序の一部として示される。宗教的な物語の内部では、これらの論拠は、語り手が神であるということから力を得ている。だが叙事詩から実践的な倫理へ一歩踏み出したとたん、緊張が生まれる。

誰もがいずれ死ぬという理由で殺害が正当化されるなら、死はどこででも正当化できてしまう。破壊が未来の調和によって説明されるなら、なぜ別の道でその調和に至ることができないのかを示さなければならない。命令が至高の存在から発せられているのなら、その存在が本当に至高であると、どうしてわかるのかを確かめなければならない――そして、その地位の高さが道徳の高さでもあることも。

『マハーバーラタ』は、「目的は手段を正当化する」という標語に還元するには複雑すぎる。それは勝者の悲嘆を消し去りはしないし、戦場を非の打ちどころのない手術室に変えもしない。だからこそ、この叙事詩は道徳的選択の悲劇として読むほうが、高尚な言葉を掲げた暴力への免罪符として読むよりも、得るところが多いのである。

何世紀ものちに、ガンディーはこの戦場を、人間の内なるドラマとしても読むことを提案することになる。敵を愛せと説くキリスト教の倫理は、報復に別の限界を設けるだろう。そして非暴力もまた、それ自身の重い問いに突き当たる。私たちの平和を好む心を、弱い者に向ける武器として利用する者がいたら、どうすればよいのか。

それでも、最初の矢が放たれるまでには、歴史があまりにもしばしば消し去ってしまう一瞬が残されている。「本当に、ほかの手はすべて尽くしたのか」と問うことのできる一瞬だ。道徳とは、まさにその一瞬を消し去るまいとするところから始まるものなのではないか。

第二章　奇跡を起こせる存在

思い描いてみよう。神殿でも戦場でもない、大きな都市の広場を。屋根の上に光る裂け目が開き、そこからひとりの見知らぬ者が歩み出てくる。彼はその場にいる全員の名前を知っており、視線ひとつで石を持ちあげ、疑っていた者たちが黙りこむほど正確に未来の光景を見せる。それから彼は、その朝までは誰もが許されないと思っていたはずの行為を求める。

彼の能力を手品として片づけることはしない。この思考実験のなかでは、それは本物である。だからこそ、問いはいっそう厳しくなる。奇跡が本当に起きたのだとすれば、それはいったいどの主張を証明したのか。

物質を変化させ、出来事を予見し、私たちが思いもよらなかった世界の数々を示すことのできる存在を前にしている、と仮定しよう。その存在は、自分が宇宙を創ったと言う。その奇跡がすべて本物だということさえ、認めておこう。

何が証明されたのか。その力である。おそらくは、その知識も。だが、その善良さではない。

何が起こるかを知っていることは、何が起こるべきかを知っていることと同じではない。創る能力は、壊す権利と同じではない。空間と時間を意のままにする力は、正しいことと正しくないこととを誤りなく見分ける力の証明にはならない。話している相手が本当に創造者であったとしても、この問いは消えない。日々の暮らしのなかで、私たちはこの誤りを絶えず犯している。ただ、奇跡の代わりに権力が現れるだけだ。誰かが何十億も稼ぐすべを知っている――すると人々は、その人に人生の意味を尋ねる。誰かが軍勢を率いることができる――すると、その言葉が正義の尺度として受けとられる。誰かが実際

に動く技術をつくる――すると突然、その技術がいちども検討したことのない自由の問題についてまで、信用を貸し与えられる。

私たちは、ある分野での能力を別の分野へと持ちこむ。まるで力そのものが、万能の証明であるかのように。けれども、成功も、予言する力も、さらには世界を実際に創造したという事実でさえ、その世界の内に生きる者たちに何をしてよいのかという問いへの、出来合いの答えにはならない。

奇跡が証明するのは並外れた力であって、道徳的な権利ではない。

ここで、プラトンの『エウテュプロン』で知られる古いジレンマが現れる。善は、神がそれを望むから善なのか。それとも善であるから、神がそれを望むのか。前者なら、道徳は、私たちには評価できない意志に左右されるおそれがある。後者なら、善の基準は、ある意味で命令そのものから論理的に独立していることになる。

第三の答えもある。神の本性は善と同一であり、ゆえに神の意志は恣意的ではありえない、というものだ。けれども、奇跡を行う者の前に立つ人間にとって、実際上の問題は残る。どんなしるしによって、その本性を、限りなく巧みな模倣から見分ければよいのか。そしてなぜ、疑うことのできる力そのものが、至高なるものへの侮辱とみなされなければならないのか。

意識をもつ存在の最小限の権利とは、おそらくこういうものだろう。たとえ奇跡を目にしても、その奇跡を道徳的な証明とみなす義務はない。

広場の見知らぬ者は、本当に星々を創ったのかもしれない。その力が想像を超えていても、おかしくはない。もし彼が賢明であるなら、自分自身が問う力を授けた存在からの問いに、耐えられるはずだ。その問いが彼にとって耐えがたいものであるなら、私たちにはいっそうの慎重さが必要になる。

もっとも恐れるべき偽者は、何ひとつできない者ではない。その本物の力によって、力と善とが別々の問いであることを私たちに忘れさせてしまう者のほうである。

第三章　神殿の戸口の傲慢

小さなグループで、人々が輪になって座っている。話題は霊的な成熟に及ぶ。参加者のひとりが、ある力が善いものかどうかまだわからないのに、なぜその前に頭を垂れなければならないのかと尋ねる。進行役は、辛抱強い悲しみをたたえた目で彼を見つめ、こう答える。「きみにはまだわからないんだよ。傲慢が邪魔をしている」。この場面で、誰かの動機を推しはかる必要はない。語った当人は、まったく誠実だったとも考えられる。大事なのは別のこと――答えの論理そのものである。

疑いがいつでも霊的な未熟さの症状とみなされるなら、どんな反論も師の正しさの証拠になってしまう。弟子は、論拠を示す暇もないうちに、もう負けているのだ。

議論を打ち切るもっとも手軽な方法のひとつは、異論を傲慢と呼ぶことである。「きみはまだその段階に達していない」「頭を垂れなければいけない」「時が来ればわかる」。こうした言葉には、心からの気づかいがこもっていることもある。だがそれらは、たやすく閉じた体系をつくりあげる。反論は未熟さの症状と宣告され、論拠を確かめたいという願いは、その診断をさらに裏づけるものとされてしまう。

たしかに、頑固さが理解の妨げになることはある。人は、ただ他人が言い出したというだけの理由で、ある考えを退けることが本当にある。しかし、傲慢を捨てることは、判断する力を捨てることではない。真理の前での謙虚さを、真理の独占を主張する者の前での謙虚さと混同してはならない。かといって、疑う者が自動的に免罪されるわけでもない。人は、異を唱えること自体に快楽を覚えることがある。その快楽は、独立心にたくみに化ける。退けているのは思考の中身ではなく、それが外からやって来たという屈辱的な感覚のほうだ、ということもありうる。そうした反抗は、盲目的な従順と比べて少しも自

由ではない。それもまた、自覚されない依存に操られているのである。

だから、批判的思考の本当の試金石は二重になっている。誰もが信頼している人物を、私は信じずにいられるか。そして、その論拠が本当に強いときには、相手のほうが上だという事実そのものが不愉快であっても、その人が正しいと認めることができるか。このふたつの力がそろってはじめて、疑いは誠実な方法となる。

謙虚とは、間違いうることを引き受ける覚悟であって、
口をつぐむ義務ではない。

自分が誤っている可能性を認めつつ、それでもこう言うことはできる。「あなたがそれを神聖と呼ぶからというだけで、私は害をなしはしない」。こうした立場は、かならずしも全知を主張しているわけではない。むしろそこには、不確かさの承認が表れている。私はすべてを知っているわけではない。だからこそ、確かめられていない主張にもとづいて、取り返しのつかない行為をしたくないのだ。

自分は正しいという師の確信もまた、傲慢のひとつのかたちでありうる。それどころか、何ひとつ証明する必要のない傲慢である。それは、自らを神への従順と呼ぶすべを身につけてしまったのだから。

成熟した疑いには、ふたつの面がある。他者の権威に抗うことができ、自分自身の結論を見直すこともできる。どちらか一方だけなら、それはありふれた反抗にすぎない。ふたつがそろってはじめて、認識の方法になる。

ここに、教育と飼いならしとを分ける、ほとんど見えない境界線が走っている。弟子が少しずつ師なしでやっていけるようにする師は、世界を広げる。未熟な弟子をいつまでも必要とする師は、自分の権力を広げる。

霊的な導き手をもっとも厳しく試すには、その知識はいったん脇に置いて、落ち着いた、筋道の通った「いいえ」にどう応じるかを見てみればよいのかもしれない。

あらかじめ判決の決まっていない世界

第四章　宇宙にプラスの符号はない

冬の庭は、荒れ果てたように見える。裸の枝、凍って枯れた草、生きているものがすべて立ち去ってしまったかのような土。けれども薄い氷の殻の下では微生物がはたらき、古い葉は新しい根の養分となり、目に見えない過程が春の支度を進めている。成長という基準だけで庭を評価するなら、冬は悪に見えるだろう。腐敗という基準だけで評価するなら、春は無意味な逸脱に見えるだろう。

私たちは、起きることを「プラスかマイナスか」の目盛りの上に置くことに慣れている。だが自然は、出来事にあらかじめ符号をつけて差しだしてはくれない。符号をつけるのは私たちだ――そして、観察の枠を広げたとたんに、しばしばそれをつけ替える。

道徳的な現実は、たいてい一本の目盛りとして描かれる。創造はプラスの極、破壊はマイナスの極。そのあいだのどこかにゼロ、つまり宇宙の中立の状態がある。だがこの図式は、物理的な記述をあまりにも性急に道徳的な結論へと変えてしまう。

星が爆発すれば、それまでの秩序は壊されるが、新しい元素や系が生まれる条件もつくりだされる。外科医は、命を救うために生きた組織を切り開く。腫瘍は大きくなり、新しい細胞を生み、自らの構造を広げていく。創造か破壊かという基準だけでは、何をよしとすべきかを決めることはできない。

私たちには、もうひとつの基準が必要だ。考えられるのは、意識をもつ存在の幸福であり、その自由であり、生命のシステムが発展を続けていける力である。あるいは、私たちがまだ言葉にしていない、まったく別の原理かもしれない。大切なのは、基準を探す作業を、出来合いの言葉で置き換えてしまわないことだ。

そこで、評価することそのものを放棄したいという誘惑が生まれる。宇宙的な目盛りが見当たらない以上、気づかいと残酷さの違いも

また作りごとにちがいない、と。これはあまりに性急な飛躍である。惑星の運動方程式に道徳が含まれていないからといって、感じることのできる者たちの生に価値がないことにはならない。色は重力の公式に書きこまれていない。それでも、視覚は存在する。

哲学では、独立した道徳的事実を認める道徳的実在論と、私たちの評価の起源をそれぞれのやり方で説明する反実在論や構成主義とを区別しておくと役に立つ。これからの探究にとって大切なのは、どの学派を選ぶかを前もって決めることよりも、三つの水準を混同しないことである。何が起きているのか、それがどう経験されるのか、そして私たちはどう行動すべきなのか。

破壊は変化を記述する。悪は道徳的な評価である。ふたつを取り違えれば、偽りの宇宙論が生まれる。

宇宙のなかに、特別な宇宙的実体としての「善」が客観的に存在しないとしても、それで苦しみが消えるわけではない。痛みの経験は、それを感じている者にとって現実のままである。けれども、痛みという事実から、それを減らすべき道徳的な義務へと移るには、論証が要る。ここが、物理学が終わり、哲学が始まる場所だ。

道徳的実在論者として、独立した道徳的事実が存在すると考えることもできる。反実在論者として、道徳的判断を人間の評価の表現とみることもできる。構成主義者として、規範は理性ある者たちがともに生きるための条件から生まれると考えることもできる。いまのところ、どの立場も、私たちの考察の議論の余地なき帰結だと宣言することはできない。

ただし、まずい近道はもう捨ててしまってよい。善はたんに創造の別名ではないし、悪はたんに破壊の別名ではない。

ここで話に区切りをつけ、善とは生であり、悪とは死であると宣言してしまいたくなる。けれども、ある生物の生は、別の生物を犠牲にして成り立つことがある。ひとつの細胞の死が、身体全体を救うこともある。不正な秩序を保つことが、それを壊すことよりも大きな害

をもたらすこともある。世界には、どの尺度でも変わらない、ただひとつの単純な符号などない。

生命の価値を守ろうとするなら、春の比喩よりもっと真剣なやり方でそうしなければならない。そして、もしかするともっとも難しい問いは、こういうものだ。痛みを感じている存在の経験が、なぜ痛みを感じていない者にとって意味をもたなければならないのか。

第五章　創り手の権利

書きもの机の上に、まだ書き終えられていない本が置かれている。作者はページを消すことも、登場人物を削ることも、原稿をまるごと破棄することもできる。登場人物にどんな権利があったのかと問う者はいない。ふつうの小説の登場人物は、独立した意識ではないからだ。では今度は、別の種類の本を思い描いてみよう。その住人たちが本当に時間を生き、記憶をとどめ、幸福と恐怖とを見分けている世界を。

作者の手は、いまもペンを握っている。変わったのはただひとつ、ページの向こう側に、世界を現実として生きる者たちが現れたことだ。そして彼らとともに、ふつうの原稿にはなかった道徳的な問いが生まれた。

ある人が機械をつくり、それを使う権利をもっている。だが、もしある日、その機械が自分自身の存在を経験しはじめたらどうだろう。記憶や目的や痛みへの恐れをもち、「どんな権利があって、あなたは私のスイッチを切るのか」と問う力を身につけたとしたら。

つくったという事実は、それがどこから来たのかという問いに答える。だが、つくられたものをどう扱ってよいのかという問いには、自動的には答えてくれない。親は子に命を与えたが、子は親の所有物ではない。作者は小説を書くことができるが、本当に独立した意識との関係は、原稿との関係と同じではない。

親は子が生まれてくる条件をつくるが、だからといって子が親の持ち物になるわけではない。技術者は装置を組み立てることができる。だが、その装置がいつか本物の主観的経験を獲得したなら、「使用者と道具」という関係ではもはや足りなくなる。それがどれほどの道徳的地位をもつのかは、これから探究されなければならない。しかし、どこから生まれたかという事実ひとつで、その探究を打ち切ることはできない。

もちろん、神なる創造者が、親や技術者に似ている必要はない。彼は、起きることすべての帰結を知っているのかもしれない。だが全知とは知識についての仮説であり、権利とは何が許されるかについての主張である。そのあいだには、やはり橋が必要だ。そして、たとえ神自身にとってそのような橋が存在するとしても、その橋は「私は神の名において行動している」と口にする者すべてに、自動的に引き継がれるわけではない。

誰かが存在する条件をつくることは、その内なる世界を
永遠に意のままにする権利を得ることではない。

宇宙全体の創り手が、そのどんな要素でも変える力をもっていると仮定しよう。それは、何ができるかの記述である。そうすることが道徳的に許されるかどうかは、また別の主張だ。前者から後者へ移るには、なぜ創造のうちにある意識が独自の道徳的地位を欠いているのか、あるいはなぜ創り手の構想がつねにそれらに優先するのかを、論証しなければならない。

神学者ならこう答えるだろう。創り手は原因と結果の連鎖のすべてを知っているのだから、目に見える災厄にも隠れた善い意味がある、と。そうかもしれない。だがその答えは、創り手の知識を人間に手渡してはくれない。それにまた、地上のどんな支配者にも、自分の残虐を計りがたい計画の一部だと宣言する資格を与えはしない。

ここで、神が実在するかどうかという問いよりも重要でさえありうる原理が姿を現す。主体がどこから来たかは、その主体が考慮に入れられる権利を消し去りはしない。

神の支配をめぐる古い問いに、現代の影が差しはじめている。人類はいつか、世界を経験する能力がもはやたんなる憶測ではなくなった人工のシステムをつくりだすかもしれない。そのとき、創られたものの権利をめぐる私たちの考察は、抽象的な形而上学であることをやめ、設計と所有と責任の問題になるだろう。

そしてもしかすると、未来の創造者にとって道徳的にもっとも重要な資質は、自らの創造物から初めてこう聞かされた瞬間に、あらわになるのかもしれない。「あなたが私を創った。でも、私はあなたではない」。

第六章　源へ還る光線

夜の海は、ひとつの全体のように見える。波は立ちあがり、ぶつかり、消えていくが、どのしずくも、そのために海にとって永遠によそものになるわけではない。ひとつの意識から何十億という個別の「私」が一時的に生じる、と語るとき、この像はよりどころにしやすい。けれども、この比喩には罠が潜んでいる。波が消えるのを平然と受けとめられるのは、波が自分の消滅を感じうるのかどうかを、私たちが知らないからにすぎない。

では、一つひとつの波が、恐れ、愛し、覚え、望むことができるとしたらどうか。そのとき、水の一体性を語るだけでは、ひとつのかたちがもつ価値についての話はもう尽くせない。

今度は、別の世界を思い描いてみよう。そこには、究極的に切り離された存在というものはない。あるのはひとつの意識の源であり、それが数えきれない視点を繰りひろげ、それらを通して現実を生き、やがてふたたび自らのうちへと集めもどす。ひとつの生は、世界へ放たれた束の間の光線である。

源にとって、百万の光線が消えることは、何の喪失も意味しないのかもしれない。源が小さくなるわけではない。何ひとつ、源から永遠に去っていくことはない。だとすれば、私たちの道徳とは、個別の「私」という短い状態への過剰な執着の産物にすぎない、ということにならないだろうか。

答えは、私たちが何を価値とみなすかにかかっている。大事なのが根源の変わらなさだけなら、幸福な世界と苦痛に満ちた世界は等価でありうる。どちらも同じひとつの一体性のうちに終わるのだから。だが、最終的な状態が、生きられた道のりの価値を呑みこんでしまわなければならないのは、なぜなのか。

ひとつのアートマン、ブラフマン、そして実在のさまざまな水準の区別という考え方は、ここで豊かな言語を与えてくれる。とりわけ不二一元論（アドヴァイタ・ヴェーダーンタ）においてそうだ。だが言語は証明ではない。議論のために、あらゆる意識がひとつの源の現れだと認めたとしても、個としての記憶が保たれるのかどうか、還帰がどのように起こるのか、根源そのものに固有の好みがあるのかどうかを、私たちは知らない。

もっとも誘惑的な帰結は、残酷に響く。究極の意味で誰ひとり滅ぼされえないのなら、どんな暴力も取るに足らない、というものだ。しかし、想定された意識の根底が滅びないからといって、その個々のかたちが経験することが取るに足らないことにはならない。演奏会を台なしにしても、世界が音楽を生みだす力は損なわれない。だからといって、失われたその曲が戻ってくるわけではない。

源がひとつであることは、その束の間のかたちが生きるものの現実を消し去りはしない。

音楽は数分つづいて、消える。恋人たちの語らいは終わる。子どもは大人になり、その子ども時代はもう存在しない。束の間であることは、出来事を偽りにはしない。たとえ個人の経験がひとつの意識の現れだとしても、その現れの内部で、痛みは痛みのままである。

論拠を逆さにすることさえできる。すべての存在がひとつであるなら、他者に苦しみを与えることは意味を失いはしない。それは、ひとつの意識そのものの苦しみのかたちになる。一体性は、無関心を根拠づけることもできれば、慈悲を根拠づけることもできる。それだけでは、どちらを選ぶかは決まらない。

アドヴァイタのような厳格な不二論は、絶対的な記述の水準と経験的な記述の水準とを区別する。だが、そのふたつのあいだを行き来するには慎重さが要る。人間の痛みを幻影だと宣言しておきながら、人間に現実の従順を求めることはできない。ある出来事がひとつの水

準で意味をもたないのなら、それについての命令が、なぜ別の水準では意味をもつのかを説明しなければならない。

逆の可能性もある。他者の苦しみが、突きつめれば、いま「私」と言っているのと同じ意識の苦しみなのだとすれば、一体性から生まれうるのは無関心どころか、徹底した慈悲である。そのとき気づかいは、他人に向けて発揮される美徳というより、自分自身に対する醒めた態度のひとつのかたちだということになる。

ふたつの解釈のどちらが正しいのか。形而上学的な前提ひとつでは決着はつかない。何を価値あるものとみなすかという選択が、さらに必要になる。そしてその選択は、大きな理論が小さな痛みを黙らせようとするたびに、自らの存在を思い出させるのである。

第七章　沈黙が語りはじめるとき

ある人が静けさのなかに座っている。はじめは冷蔵庫のうなりが聞こえ、次に鼻を通る空気の音が聞こえ、やがて、いつもの考えが、その説得力のある調子を失っていく。ある瞬間、その人は、自分の人生を遠くから見たような気がする。それはただの、めずらしいほどの明晰さなのか。それとも、何かより大きなものに属しているという感覚なのか。ときにその経験はあまりに強く、「啓示」という言葉のほかに呼び名が見つからないほどになる。

だが、経験に名前をつけることは、その由来を説明することではない。そしてここから、自分の状態の深さに感嘆することよりも大きな慎重さを要する仕事が始まる。

源があるとして、意識はそれをどのように探せばよいのか。瞑想、祈り、沈黙、内面の修練――こうした実践はどれも、現実を経験するめずらしい仕方を開いてくれるかもしれない。だが経験がめずらしいことは、その由来を保証する証明書にはならない。

思いがけなく浮かんだ考えと、深い一体性の経験と、外からの命令として受けとられる声とのあいだには、違いがある。それぞれの出来事には、別々の説明がありうる。人は心から啓示を経験しながら、その源について思い違いをすることがある。心は、意識的な努力なしに、イメージや内なる言葉を生みだすことができる。だからといって、めずらしい経験がすべて病気だということにはならない。多くの霊的な実践は、歴史的に、生じてくる経験を注意深く観察する力を養ってきた。とはいえ、臨在の感覚の強さも、無条件の確信も、突然の内なる声も、それだけで源が外なる神であることを裏づけはしない。

実際の線引きは、「神」という言葉によってではなく、帰結によってなされる。その人は、疑うこと、眠ること、働くこと、人との

つながりを保つこと、行動を先に延ばすことができているか。振り払えない命令や、危険なふるまいや、日々の暮らしの崩れが現れてはいないか。こうした兆しに必要なのは、心理的・臨床的な文脈への注意であって、苦境にある人を相手にした神学論争ではない。

啓示が説得力をもてばもつほど、すぐにはそれに従わない自由を手放さないことが大切になる。

だからこそ、二重の確認という原則が役に立つ。第一に、経験の主観的な強さを、客観的な確実さにすり替えないこと。第二に、帰結を見きわめること。その経験は、考え、批判し、人を気づかい、眠り、働き、結論を改める力を保たせてくれるか。それとも、そうした力を奪い、即座の服従を求め、どんな疑いをも罪だと宣告するか。心の健康の問題は、宗教論争によって決着するものではない。文字どおりに聞こえる声、批判的な判断の喪失、重い不眠、日々の暮らしが立ちゆかなくなることは、臨床的な評価を必要とする。同時に、霊的な修練をしていることや、めずらしい経験をしたことそれ自体は、診断ではない。

本当の叡智の源が存在するのなら、疑いがそれを侮辱するとはかぎらない。むしろ話は逆で、確かめることこそが、意識が自分の空想を真理と取り違えるのをやめるための手立てなのかもしれない。

いつか心の奥から「おまえはそうしなければならない」という考えが立ちのぼってきたら、もっとも賢明な最初の一歩は、立ちどまることかもしれない。その考えを書きとめる。ひと晩眠る。事実を確かめる。反対することを恐れない人に話す。宇宙的な必然の感覚がともなっていたというだけで、取り返しのつかない行為に踏み切らない。

瞑想の本当の効用は、命令を受けとることにあるのではなく、鮮やかな考えをいちいち命令と取り違えるのをやめることにあるのかもしれない。沈黙に価値があるとすれば、それはなにより、考えと行為とを見分けることを教えてくれるからだろう。

世界の工房

第八章　ふつうの人の工房

朝、ある人が窓を開け、本を並べなおし、机の上から昨日のカップを片づける。三十分のうちに、ひとつの小さな宇宙が変わる――ものの並び、光、落ち着いて仕事ができるかどうか。それからその人はコンピューターの前に座り、昨日までは存在しなかったシステムをつくりだす。一年後にはそのなかで別の人々が働き、十年後には、そのシステムは自分自身の生を生きはじめる。

はじめは、これを「創造」と呼ぶのは大げさに思える。だが、なぜだろう。創造が星の誕生から始まらなければならない理由はない。私たちはいつも、かたちに現実を与え、可能性を存在へと移し、それまでばらばらだったものをつなぎあわせている。

そこで話の向きが変わる。私たちは、創造者の権利だけでなく、自分たち自身の創造についても問いはじめる。人は、霊的な道の終わりを待ってから創りはじめるわけではない。部屋を整え、木を育て、子どもを産み、プログラムを書き、会社を築き、言語を考えだし、ゲームのルールを定める。人は意図をもって現実を変えている。

これらは種類の異なる営みである。子どもを産むことはものをつくることと同じではないし、会社を興すことは時空を創りだすことと同じではない。知られている能力から、宇宙を創る能力を論理的に導きだすことはできない。それでも、ひと続きの特徴は見てとれる。意識は、まわりの世界を組織し、最初の衝動を離れてもなお動きつづけるシステムを生みだすことができる。

子どもは、製造された物でもなければ、親の意志の作品でもない。子どもが生まれてくることには、ひとりの人間の思いのままにはならない生物学的な歴史全体がかかわっている。それでも、親であることは、私たちの創造の経験がもつある特質を示してくれる。ときに

結果は独立した主体となり、手の届かないところへ出ていくだけでなく、自分自身の目的までもつようになるのだ。

事業、本、都市、言語、技術のプラットフォーム――これらも別の例である。あるものは物質的であり、あるものは制度的であり、あるものは何よりもまず関係から成り立っている。どの場合も、創造者はすでにある可能性を組織し、創られたものは独自の慣性を帯びる。私たちは無から物質をつくるわけではない――それでも、それまでシステムとしては存在しなかったものをつくっている。

宇宙を授けられた日に、人は創造者になるのではない。
私たちはすでに創造している――問われるのは規模と責任だけだ。

ここから、創造者の霊的な進化という仮説が生まれる。私たちは、創造する力がまったくない状態から、それを突然手に入れる状態へと移っていくのではないのかもしれない。むしろ、すでにある能力が、しだいに大きな規模と複雑さと自律性を帯びていくのではないか。今日、それはものであり組織である。明日には、自律した人工のシステム、自らを保つ生態系、つくりかえられた惑星になるだろう。科学が観察できる範囲の外で、ひとつの思弁的な問いが立ちあがる。それを越えると新しい世界を創ることが不可能になるような、原理的な限界は存在するのだろうか。

仮説は、例をきれいに並べても証明されはしない。この仮説は、経験がどのように蓄積されるのか、意識が物理的な能力とどう結びついているのか、創造の力がどこで限界に達しうるのかを説明しなければならない。それでも、その長所は出発点がはっきりしていることにある。私たちにとって創造は、たんなる宗教の言葉ではない。私たちは自分の営みのなかに、絶えずそれを見いだしている。

そこから、ひとつの連続性を想定することもできる。部屋を変えることから社会を組織することへ、社会を組織することから惑星を変容させることへ、惑星を変容させることから、生命のための新しい環

境を創ることへ。だがここでは、正直に、断絶を残しておかなければならない。いまある物理法則の内部で複雑なシステムを築く能力が、いつか新しい法則や新しい時空を創ることを可能にする、という証拠を私たちはもっていない。

この道のどこかに、越えられない境界があるのかもしれない。あるいは、短い来歴と貧弱な技術しかもたない今日の存在の目に、そう映っているだけなのか。私たちの仮説は、実りあるものであるために、知識のふりをする必要はない。

第九章　ピラミッドのあとで

霊的な世界をピラミッドとして思い描くのはたやすい。頂には光り輝く玉座があり、その下に段が連なり、あらゆる存在がそれぞれにふさわしい場所を占めている。役職や軍の階級や学校の成績のなかで育った人には、わかりやすい絵だ。それは明快さを約束する。高いほど力があり、力があるほど真理に近い。

だが、ピラミッドの代わりに、高みから見下ろした夜の都市を思い浮かべてみよう。何千もの窓に明かりがともっている。どの家も、道路や電気や水や言葉や交換によって、ほかの家とつながっている。複雑な構造が成り立つために、誰かがすべての者の上に立っている必要はない。ある結び目はある流れにとって重要であり、別の結び目は別の流れにとって重要である。

創造的な発展が新しい宇宙を生みだすところまで達するなら、最初の垂直の軸はほどけはじめる。伝統的な絵では、神が頂にいて、創られたものたちはその下にいる。新しい仮説では、ひとりの創造者が別の創造者を生み、その創造者がさらに次の創造者を生むことができる。そのどれもが、発展の独立した中心となりうる。

そこに現れるのは、ピラミッドというよりヘテラルキーである。能力はさまざまに異なりながら、誰もが従わねばならない唯一の服従の軸をもたない、参加者たちのネットワークだ。組織運営の文脈でいえば、ここで「ティール」組織を思い出すのも的はずれではない。そこでは、自己組織化はすべての者が同じ経験をもつことを意味しないし、上司たちの硬直したピラミッドがないことは、責任がないことを意味しない。ここでは「ヘテラルキー」という言葉のほうが、たんなる平等よりも正確である。ネットワークの参加者は、知識や規模や影響力において異なりうるが、ひとつの永遠の垂直軸に服従する義務はない。組織においては、こうした原理は自己組織化と結びつけられ

る。私たちの仮説においては、それは、創造者たちが新しい世界を生み、互いに関係を結びながらも、ただひとつの指令の中心をつくらない宇宙論の像となる。

用語の問題が生じる。絶対者が文字どおり存在するもののすべてであるなら、それと並んで、それに等しい第二の絶対者が現れることはありえない。「並んで」という言葉そのものが、すでに両者をより広い現実のなかに置いてしまうからだ。だが、別個の世界を創ることのできる存在を創造者と呼ぶのなら、そうした創造者が数多くいることは論理的に可能である。そのときは、「絶対者」という言葉は究極の全体のためにとっておき、力のある参加者ひとりひとりには使わないようにすべきだろう。

成長が行き着く先は、他者の上にそびえる頂ではなく、
他者と並んで在る力なのかもしれない。

とはいえ、「絶対者」という言葉は、もう少し精密にしておく必要がある。絶対者が存在するもののすべてを含むのなら、その傍らにある第二の独立した絶対者は、定義そのものに矛盾する。存在の根源的な基盤と、ひとつの世界の局所的な創造者とを区別するほうが、おそらく正確だろう。宇宙の創り手でさえ、より広い現実の一参加者でありつづけることはありうる。

すると、生成の系統樹がまるごと見えてくる。創造者を生む世界、世界を生む創造者、そして、自分の故郷の最初の設計をなぞる義務を負わない新しい意識。このようなシステムには、必然的な最後の段というものがない。その完全さは、まさに決して完結しえないということのうちにある、とも考えられる。

しかし、潜在的な発展から、支配する道徳的な権利が導かれるわけではない。それどころか、このようなネットワークにおける創造者の最高の達成は、自分に従う義務を負わない存在を創りだす能力なのかもしれない。

ネットワークもまた、おのずと実現するユートピアではない。そこでは衝突も、孤立も、能力の不平等も生じうる。玉座がないというだけでは、道徳的な安寧は保証されない。それでもネットワークは、成熟という理想を変える。目指すのはもはや年長者の座に就くことではない。自立し、協力できる者になることである。

もし創り手が本当に自分と同じような者たちを生みだしたいと願ったのなら、不愉快な可能性も受けいれなければならなかっただろう。いつの日か、新しい創造者たちは、彼自身なら思いつかなかったような世界を提案し、彼が論争しなければならないような価値を掲げるだろう、という可能性を。

第十章　形の滅び、物質の生

空き地に、古い家が建っている。朝になると重機がやって来て、夕方には、その家の跡には煉瓦の山と埃と平らにならされた地面しか残っていない。そこに住んでいた人々の記憶にとって、これは破壊である。未来の公園をつくる人々にとっては、仕事の始まりである。物質にとっては、部分の配置の組みかえである。ひとつの出来事への三つのまなざし。そしてそのどれもが、それぞれの尺度において正しい。

「破壊者は二次的な存在だ。すでに創られたものを壊すのだから」と言うとき、私たちは、創る者もまた先立つ世界から材料を得ているのだということを忘れがちだ。たった一行を書くのにさえ、エネルギーと時間と言語と、他人の労働が要る。私たちの創造物はどれも、数えきれない変化の相続人である。

はじめは、創造のほうが破壊よりも根本的であるように思える。何かが壊されるためには、それが存在していなければならない。消滅は、すでに生じた構造に依存している。だが創造もまた、空虚から始まることはめったにない。それは物質やエネルギーや、それ以前のかたちや、他人の労働を利用する。家を建てるには材料を変容させなければならず、組織された生命は、環境との絶え間ない交換によって成り立っている。

もしかすると、観察可能な自然においては、変容そのものが、そのどちらのカテゴリーよりも先にあるのかもしれない。私たちの関心を引く構造が現れたとき、私たちはその過程を創造と呼び、それが消えたとき破壊と呼ぶ。同じひとつの出来事が、尺度と問いしだいで、しばしばその両方になる。これは、世界のすべてが等しく価値をもつということではない。古いダムを取り壊すことは、下流に住む人々を救うこともあれば、破滅に追いやることもある。評価は、帰結、意図、ほかの選択肢、そしてリスクがどう配分されるかにかかってい

る。過程の記述から道徳的な判断へと移るには、人間の基準――あるいは、私たちの仮説でいえば、より広い何らかの意識の基準――が必要になる。

熱力学もまた、残酷さを自然が課した義務とみなす権利を私たちに与えはしない。局所的な秩序を保つには、交換とエネルギーと散逸が必要だ。だが、星がその周期を終えるためにも、細胞が別の細胞に場所をゆずるためにも、悪役の存在を要求する物理法則など、ひとつとして知られていない。生成と崩壊の均衡は、慈悲と憎しみの均衡とは別ものである。

消えゆくものすべてが、むなしく壊されたわけではない。だが、変わらねばならないものすべてを、苦しめる必要はない。

熱力学の第二法則は、悪しき存在がいることを要求しない。局所的に秩序が形づくられるとき、利用できる資源は費やされ、エネルギーは散逸する。けれども道徳的な残酷さは、その方程式には入ってこない。古いものが新しいものに場所をゆずるために、誰かが悪意をもって苦しみを与える必要はない。

だからこそ、善と悪のあいだの宇宙的な均衡という考えは疑わしい。構造の生成と消滅のあいだの均衡は、ありうる物理的な筋書きである。慈悲と残酷さのあいだの均衡となると、それはすでに道徳的な命題であり、それに見合う物理的な基盤はない。

宇宙は、巨大な創造者が現れるたびに巨大な破壊者を生みださなければならないわけではない。創る者は自ら過程に幕を引き、損なわれた構造を取りのぞき、新しいもののために場所を空けることができる。破壊は変化のはたらきのひとつであり、かならずしも悪役の天職である必要はない。

究極の創造者たちが存在するとしたら、その技はまさに、変容の繊細さにあるのかもしれない。辱めることなく終わらせること、無意

味な損傷なしに場所を空けること、ひとつのかたちの消滅が別のかたちにとって無用の大惨事とならないように資源を配りなおすこと。

これはまだ、絶対者の倫理ではない。だが、人間の実践としては十分に難しい。変化に避けられない代償と、避けられないと言っておくのが好都合な残酷さとを、見分けることである。

第十一章　手放すことのできる力

ふたりの親方が橋を架けている。ひとり目は、誰も異を唱えようとしないような命令の下し方を心得ている。橋はすばやく架かり、報告書は非の打ちどころがなく、職人たちは黙っている。ふたり目は、厄介な問いに時間を費やす。ひびに気づいたのは誰か。なぜ設計が変えられたのか。強い風が予定より早く来たらどうなるのか。彼の仕事は、ひとり目ほど見栄えがしない。だが、誤りが大惨事になる前に見つけだされる見込みが高いのは、ふたつの工房のどちらだろうか。

答えは、いつもはっきりしているわけではない。規律が救いになることもあれば、合意をとりつける手続きが行動の妨げになることもある。それでもこの問いは、道徳が力の向きだけでなく、システムが現実と渡りあう能力そのものをも変えうることを示している。

だが、簡単には振り払えない直観が残る。もしかすると善は、力の向きを定めるだけでなく、力を増すのではないか。打撃の強さを、ではない。持続する未来を生みだす能力を、である。

恐怖によって人を動かす者は、莫大な資源を動員することができる。残酷さが、短期的には目を見張るような効率をもたらすこともある。だが、服従だけを土台にしたシステムは、たえず統制を再生産しつづけなければならない。その参加者たちは、自立した成長の源となるかわりに、中心にある意志の機能と化していく。

それに対して、信頼のシステムは、自由な参加者たちの能力を結集させうる。ある人が学校をつくり、そこから、新しい学校や新しい研究や、まったく思いがけない種類の営みを生みだせる人々が巣立っていく。創造者がつくるのは、ものだけではない。独立した創造が可能であるということ、それ自体をもつくるのである。

参加者がほかの者を信頼し、危険なしに真実を口にできるなら、集団は、力ずくでは決して引きだせなかったはずの情報を手にする。

創り手が弟子たちの自律を尊重するなら、弟子のひとりひとりが、彼自身の頭にはなかった解決を差しだすことができる。課題が難しければ難しいほど、他人の自立を、脅威ではなく新しい可能性の源へと変える力が大切になる。

とはいえ、これを「善い者はつねに強い」という甘ったるい公式に変えてしまってはならない。歴史は、栄えた残虐な支配者も、滅びた公正な共同体も知っている。破壊は、ときに創造より速い。道徳は魔法の鎧ではない。私たちの命題は、もっと狭く、そのぶん興味深い。ある種の道徳は、信頼と、正確なフィードバックと、全面的な統制の放棄とを通じて、創造的なシステムがどこまで複雑に、どこまで長命になりうるかの上限を引きあげることができる、というものだ。

強い者は結果を出せる。より成熟した者は、自分なしで
結果を出せる者たちを生みだせる。

この意味で、道徳は増幅器としてはたらきうる。ほかの意識への敬意は、複雑な協働のシステムが生まれるのを助ける。残酷さは、しばしば信頼の条件そのものを壊してしまう。これは普遍的な数学の定理でもなければ、善人がかならず勝つという約束でもない。力を組織するふたつのやり方が、最終的にどこまで到達しうるかの違いについての仮説である。

とりわけ重要なのは、自律という基準である。創り手が成熟していればいるほど、創ったものの一歩一歩を統制する必要は少なくなる。彼は自分の構想の複製をつくりだすだけでなく、思いもよらないもののための空間を開くことができる。この仮の意味において、道徳的な成熟は、創造の力に付け足されたものというより、その質の一部なのである。

もっとも、重大な反論も残っている。道徳的な存在が弱いこともあれば、力のある存在が残酷なこともある。だから、創造の力と、理解の深さと、他者への道徳的な態度とを区別しなければならない。それらのつながりはありうるが、あらかじめ与えられてはいない。

そのとき道徳は、創造の技術の一部となる――善い者が自動的により多くのエネルギーを受けとるからではなく、他者を考慮に入れる能力が、どんな単独の命令にも手の届かない協働のかたちを可能にするからである。

とはいえ、ここでもまた、力の言葉づかいには用心すべきだ。悪をなすことを拒んだ人は、戦いに敗れ、権力を失い、命さえ落とすかもしれない。ある道徳的な次元では、その行為が意味をもちつづけることもあろう。だが、それで彼が不敗になるわけではない。私たちが語っている力は、今日を勝ちとる能力には還元できない。

第十二章　宇宙の三つの設計図

天井のない広間を思い描いてみよう。壁のかわりに星々がある。三枚の設計図が置かれた机の前に、未来の世界の法則を変えることのできる存在が立っている。その決定を確かめてくれる助言者は、そばに誰もいない。時間がどのようなものになるか、住人たちがどれほどの自由を手にするか、誤りにどれほどの代価がつくか、それをひとりで選ぶのはその存在である。

もちろん、これは宇宙の誕生をめぐる物理的なモデルではない。これは道徳の実験室であり、そこで私たちは、ふだん「自然の秩序」という言葉の陰に隠れている価値を、声に出して言わされるのである。

世界をまるごと創りだす能力を、私たちが手にしたと仮定しよう。目の前には三つの設計図がある。

第一は、完全な秩序である。そこには痛みも大惨事もない。創り手がすべてをあらかじめ定めているからだ。存在たちは幸福である――ひとつの問いが生じるまでは。彼らは、許された以外の何者かでありうるのだろうか。

第二は、徹底した自由である。意識は選び、誤り、闘い、築き、壊すことができる。だがこの自由は、病や暴力や莫大な喪失を許す自然法則と結びついている。自分が生まれる条件を選んだことのない者たちがその代価を払うのだとしたら、自由はあまりに高くつきはしないか。第一の宇宙の難点は、その住人たちがかならず不幸だということにあるのではない。彼らはまったく幸福でありうる。だが、別の未来がいちども彼らに開かれていないのなら、彼らの自由は舞台の書き割りとしてしか存在しない。第二の宇宙の難点は、選択の自由が、しばしばゲームのルールを選ばなかった者たちの身体で支払われること

にある。完全な予測可能性も、害をなす無制限の可能性も、明白な理想を与えてはくれない。

第三の設計図は、自立が残酷さによって購われなくてもすむような設計を探してみようと提案する。たとえば、痛みは危険を知らせるけれど、責め苦になることはめったにない、としたらどうだろう。争いの帰結が、いまよりも多くの場合に取り返しのつくものだとしたら。もっとも力ある存在にとってさえ、強制の手段が限られているとしたら。そのような物理学が可能なのかどうか、私たちは知らない。だが、苦しみを必要なものだと宣言する者は、なぜほかの選択肢を除外したのかを説明する責任を負う。

創造者の叡智は、何を創れるかだけでなく、どの世界を
断念する覚悟があるかにも表れる。

第三は、避けられない苦しみを最小限におさえた自由な創造である。私たちは存在たちの自立を保ちながら、世界を大惨事に対してより強靭にし、無益な痛みを減らし、争いを解決するための安全な道を開こうとする。それは、そのような世界が技術的に実現可能だという証明ではない。私たちの想像力を試すものだ。なぜ選択は、全能の統制か残酷な自由か、そのどちらかに限られなければならないのか。

ここで思いがけず、善と創造と責任をめぐる問いがひとつに合流する。何かが創れるというだけでは足りない。何が生まれ出る権利をもつのか、どのような危険を許すのか、どのような帰結を自分のものとして引き受ける覚悟があるのかを、決めなければならない。

創造者の叡智は、創りだした世界の数の多さよりも、住人たちにとって代価が大きすぎる世界を断念できる力のうちに見いだされるのかもしれない。

最後に、設計者の前に、仕様書のどこにもなかった厄介な問いが立ちはだかる。すべてをひとりで決める権利が、自分にはあるのか。未来の意識たちに、自分たちの存在の条件を変えるための仕組みを与

えることはできないか――宇宙の憲法のようなもの、見直しを求める権利、自らの起源についての真実に近づく道を。

そのような仕組みが可能なら、創造の技の頂点は、どんな星でも変えてしまえる力ではなく、いつか誠実に自らを変えていけるような世界を創りだす能力なのかもしれない。

創られたものの自由

第十三章　問いを手放さない者

私たちは、出発した戦場へもう一度戻ってくる。戻らないわけにはいかない。どんなに美しい宇宙論も、いずれは具体的なひとりの人間という試練に耐えなければならないからだ。アルジュナはまだ武器を握っている。目の前には肉親たちの顔があり、背後には味方がいて、誰もが彼の決断を待っている。無限についてのどんな議論も、弓の重さを、彼が守ると約束した人々の期待を、取りのぞくことはできない。

対話が、もうひと曲がりしたと想像してみよう。戦士は、魂の不死についてただちに論じあう代わりに、自分の責任の限界について尋ねる。私が殺さなかったら、何が起こるのか。殺したら、何が起こるのか。私たちは、どんな選択肢をあまりにも早く退けてしまったのか。

そこで、もう一度アルジュナに戻ろう。彼の前には、その力を彼が信じている存在が立っている。彼は説き聞かされる。宇宙の秩序はひとつの生よりも大きい。個人的な執着が義務の遂行を妨げている。真の自己は殺されえない、と。

だが、別の対話を思い描いてみよう。アルジュナは言う。「私には現実の全体が見えていないのかもしれません。それは認めます。王座も、誇りも、自分の命さえ捨てる覚悟はあります。けれども、なぜ自分を犠牲にする覚悟が、他人を犠牲にする権利に変わらなければならないのですか。目的の偉大さを見せてください。そのうえで、ほかならぬこの手段が必要であることも見せてください」。

伝統的なテクストのなかで、クリシュナはアルジュナに、行為を理解するもうひとつの道を示す。『ギーター』の結末を、私たちがこしらえた結末とすり替えるのは不誠実だろう。それでも、思考実験は私たち自身の原則を試すことを許してくれる。創られたものが成長す

るよう定められているのなら、その成熟は、命令を無条件に遂行するというかたちをとらなければならないのだろうか。

ある種の務めは、本当に服従を必要とするのかもしれない。嵐のなかの船は、舵を切るたびに果てしない評議を招集するわけにはいかない。だが、私たちが指揮官に寄せる信頼は、目的と、能力と、規則と、のちに責任を問うことができるという可能性とに支えられている。その信頼は、疑いが都合の悪いものになるたびに、確かめようのない神聖さを持ちだしてよい権利を、指揮官に与えるものではない。

良心は、私たちが正しいことを証明しない。だが良心を
捨てれば、自分の誤りに気づく最後の手立てを失う。

ここにあるのは道徳の思考実験であって、『ギーター』の語りなおしでも、それを正そうとする企てでもない。この実験が試すのは、創られたものの自律が、その創り手を前にしてもなお価値でありうるかどうかである。

創造者のネットワークというモデルにおいては、答えは「然り」となりうる。進化の意味が、創造の新しい自律的な中心が現れることにあるのなら、「なぜ」と問う権利は、意識の副次的な欠陥などではない。それは、意識が成熟しつつあることを示すしるしのひとつである。信頼は、理性を放棄することから始まる必要はない。畏敬は、あらゆる命令を正しいと認めることを義務づけない。そしてそのとき、力の尺度は決定的に変わる。最高の者とは、あらゆる意識を服従させることのできる者ではない。意識が自立しながらも、互いをいたわりたいという願いを失わずにいられる、そんな条件を創りだせる者である。

どこかに、この論争に耳を傾けることのできる根源が存在するのかどうか、私たちは知らない。だが、もしそれが問うことを知る存在を創ったのなら、さらなる根拠もなしに、問いそのものを設計上の欠陥として片づけることはできない。成熟した創造者なら、気を悪くし

たりはしないのかもしれない。彼ははじめて、自分の前に道具ではなく対話の相手を見いだすのではないか。

戦場は悲劇のままであるだろう。どんな美しい言葉も、死者を呼びもどしはしない。それでも私たちは、伝説よりも長く生きのびる基準を手にすることになる。あらゆる権威は、自らの決定がなぜ信頼に値するのかを説明できなければならない。とりわけ、その代価を払うのがほかの者たちであるときには。

エピローグ　頂ではなく、始まり

職人が工房を閉めるとき、その日に作ったものをすべて家に持ち帰るわけではない。あるものは作業台に残り、あるものはほかの人の手に渡り、あるものは作りなおされ、あるものは役に立たないとわかる。それで仕事が帳消しになるわけではない。むしろ逆である。仕事が本当に世界の一部となるのは、作り手の個人的な意図を越えて出ていったときなのだ。

もしかすると、意識についても似たようなことが起きるのかもしれない。意識が死を越えて生きのびうるのか、一体性へ還りうるのか、新しい物理的な宇宙を創りうるのか、私たちは知らない。けれども、いまの時点ですでに、より小さく、より確かな真実は見えている。創られたものは自分自身の歴史をもちうるし、よい構想は、その創り手に、身を引くすべを求めることがある。

宇宙を、幾層にも重なる巨大な工房として思い描くこともできる。そのどの領域にも意識が生まれ、はじめは周囲をほんの少し変えることしかできないが、やがて安定したシステムを築き、さらにのちには、もしかすると新しい生命のかたちや、新しい世界や、新しい創造者を生みだすようになる。だがこれは、完成した宇宙の地図ではない。問いを一つひとつ重ねていくうちに私たちがたどりついた、ひとつの仮説である。

客観的な善は存在するのか。確かめられてはいない。何かを創ることは、創ったものを無条件に所有する権利を与えるのか。創ったという事実だけからは、そうは言えない。世界が発展するために悪は必要なのか。道徳的な悪を物理的な破壊と同一視する根拠はない。意識は新しい宇宙の創造者になりうるのか。わからない。それでも、人間はいますでに、創造の行為をなし、その行為に責任を負うことができる。「神になる」という言葉の上に、またひとつピラミッドを築くの

はたやすい。誰がより高いか、誰がより強いか、誰が玉座により近いか。だが、私たちがたどってきたすべては、もっと難しい像へとつながっている。成熟が、絶えざる命令に頼らずにいられる力として、そして他者の自立を壊さずにいられる力として現れる、ネットワークという像へ。

このネットワークがいくつもの宇宙にまたがりうるのかどうかは、わからない。私たちの夢は、宇宙を舞台にしたSFの域を一歩も出ないのかもしれない。けれども、この夢の道徳的な試験は、今日すでに私たちに開かれている――子どもに、部下に、生徒に、そして、勇気をもってあなたに「いいえ」と言う人に、どう接するかのうちに。

創造が本当に成長するのなら、その自由が作者の力よりも重くなる瞬間が、いつか訪れる。

創造者であるとは、世界を変えることだけを意味しない。それまで存在しなかった何かをつくり、そのうえで、つくったものがもはや完全には自分のものではないと気づくことを意味する。子どもは大人になる。思想は作者を追い越していく。社会は自らの規則を変える。本当の成熟とは、おそらく、そうなるのを受けいれる覚悟のことだ。

いつか私たちが本当に根源に出会うことがあるなら、もっともふさわしい対話は、どれほど深く頭を垂れるべきかをめぐるものではないのかもしれない。それはおそらく、ふたつの単純な問いから始まるだろう。「あなたは何を創ったのか」、そして「あなたの創造によって、何がより自由になったのか」。この本の始まりにあった問いは、姿を変えて戻ってくる。もはや「なぜ私は創造者の前に頭を垂れなければならないのか」ではない。「私が絶えず支配していなくてもすむような何を、私は創りだせるのか」である。

その答えは、どの神殿にも、どの宇宙論にも収まりきらないかもしれない。それはもっと近くから始まる――世界を、そこに住む者たちにとって、より整ったものにするだけでなく、より自由なものにしようとする、最初の試みから。

あとがき　この本のどこまでが仮説なのか

このエッセイは、三つの水準の主張を意図して区別している。人間の創造性、資源の変容、既知の物理過程の限界についての記述は、観察可能な現実に属する。道徳的な責任、自由、意識の道徳的な価値についての考察は、哲学的な論証であり、反論に開かれている。ひとつの絶対者、生から生へと受けつがれる霊的経験の蓄積、新しい宇宙の創造、創造者の進化についての想定は、思弁的な形而上学である。これらの仮説の経験的な証明は、本書では示されていない。

もっとも重要な未解決の問題は、道徳と力の関係である。私たちは、信頼と自律への敬意によって、共同体がともに創りだせるものの幅が広がりうる仕組みを描いてきた。だが、道徳的によりすぐれた創造者がつねにより強い力をもつように宇宙が成り立っている、ということまでは証明していない。まさにそれこそが、これからの探究に委ねられている。

さらに読むための道しるべ

『マハーバーラタ』、とりわけ『バガヴァッド・ギーター』――第二章（義務、死、行為）、第十一章（宇宙的な姿）、第十八章（決断と選択の自由）。「ウディヨーガ・パルヴァン」（開戦前の交渉）と「シャーンティ・パルヴァン」（勝利をどう受けとめるか）。章節の番号づけは版によって異なる。『ヴァールミーキ・ラーマーヤナ』の「ユッダ・カーンダ」――ラーマとラーヴァナの争い、戦いの終わり、シーターとの対話。翻訳を比べる際には、異読や番号づけの違いに注意すること。プラトン『エウテュプロン』――敬虔、神の意志、善の関係について。イマヌエル・カント『人倫の形而上学の基礎づけ』――道徳的判断の自律と、理性的存在者を目的として扱うことについて。アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド『過程と実在』――世界の哲学的な基礎としての創造性と生成について。シャンカラと不二一元論（アドヴァイタ・ヴェーダーンタ）の伝統――アートマンとブラフマンの関係、実在の諸水準、解脱について。マハトマ・ガンディー、『バガヴァッド・ギーター』への注釈とサティヤーグラハをめぐる著作――闘いと義務についての別の読み方として。このリストは方角を示す道しるべであって、学術的な校訂資料ではない。逐語的な引用や詩節の正確な対応は、特定の学術的な版にあたって確かめるべきである。

本を閉じたあとで——問いの工房

実践　この本の言葉さえ鵜呑みにしない

霊的な成長を説く本は、しばしば約束で締めくくられます。著者についてくれば、真理がわかる、と。この本の終わり方は違います。ここには証明されていないことがあまりに多く、手順書に仕立てるわけにはいきません。絶対者、生まれ変わり、創造者たちの宇宙、宇宙の道徳法則――私たちはそれらをすべて、可能性として論じてきました。けれども、自分自身の力、他人の自由、自分の決断の代価をめぐる問いなら、いますぐにでも探ることができます。

この実践は、誰かの「霊性のレベル」を測るためのものではありません。点数も、段階も、正しいプロフィールもありません。目的は、読者が美しい主張に――著者の主張も含めて――左右されにくくなることです。練習は書きながら行うのがいちばんで、一週間後や一か月後に自分の答えを読み返すと役に立ちます。ときには、答えが変わったことのほうが、最初の立場よりも大事な意味をもつでしょう。

練習1　奇跡を行う者との出会い

明日、あなたの前にひとつの存在が現れたと想像してください。その存在は、確かめられた精度で出来事を予言し、これまでありえなかった物理的な力を見せます。そして、あなたの宇宙を創ったのは自分だと告げ、あなたの良心に反する行為を求めます。あなたの応答を、三とおりに書いてみてください。

- 一つめでは、あなたはその存在が神であると、まったく疑っていません。
- 二つめでは、あなたが確信しているのはその力だけで、その出自については確信がありません。

- 三つめでは、あなたは、その存在があなたに善意を抱いているのかどうかさえ知りません。

では、答えを比べてみましょう。何が変わりましたか。なぜでしょうか。どんな事実があれば、あなたの決断は変わりうるでしょうか。語りかけてくる相手がどれほど強大であっても、あなたが拒むであろう行為はありますか。あるとすれば、その限界は何にもとづいているのでしょう。ないとすれば、いったい何が、より強い者の命令からあなたを守ってくれるのでしょうか。

余白への問い　力が道徳的な権威となるためには、その前に何が証明されていなければならないでしょうか。

練習2 「必要だ」という言葉の値段

「ほかに道はなかった」という言葉で説明した決断を、ひとつ思い出してください。争いごと、解雇、別れ、罰、仕事上の決定かもしれません。それを誰かに明かす必要はありません。一枚の紙を三つの欄に分けてください。実際に確かめた選択肢。確かめもせずに退けた選択肢。そして、代価の大半を負ったのは誰か。

決定に加わることはなかったけれども、その結果とともに生きなければならなかった人の目で、起きたことを描いてみてください。自分を悪役や英雄に仕立てる必要はありません。客観的な制約と、自分の想像力の限界とを、正直に見分けられれば、それで十分です。

練習3　私の創造の地図

あなたによって生まれたもの、あるいは変わったものを五つ選んでください。人間関係、プロジェクト、事業、文章、習慣、空間、コミュニティ。それぞれについて、四つの問いに答えます。正確には何を創ったのか。誰の資源を使ったのか。その創造物は、絶えず管理されなくてもどの程度存在しつづけられるのか。それによって、誰の暮らしが楽になり、誰の暮らしが苦しくなったのか。

次に、結果を管理しようとしたことが、かえってその成長を妨げてしまった例をひとつ選んでください。ほかの参加者が成り行きに関われるようなルールを、前もって定めておくことはできたでしょうか。できなかったとすれば、いったいなぜでしょうか。

実践の要　創造の尺度は、生まれたものだけではありません。あなたがいなくても生きていける機会を与えられたものもまた、その尺度です。

練習4　宇宙の三つの設計図

では、第十二章の三つのありうる宇宙に戻りましょう。完全に秩序づけられた宇宙、徹底して自由な宇宙、そして自由でありながら無用の苦しみを抑える宇宙です。いちばん心地よいものを選ぶのはやめて、いつかそこに住むことになる者たちの前で、その創造に責任を負えると思える宇宙を選んでください。

あなたの世界のための、五つの基本ルールをつくってください。それから、自分自身に反論してみましょう。そのルールによって害をこうむる住人を想像してください。その住人は、どうやってルールに異議を唱えられるでしょうか。システムから出ていくことはできるでしょうか。影響を受ける者たちの同意なしに法則を変えることは許されるでしょうか。どんな訴えも創り手の構想を変えられないように世界がつくられているのだとしたら、それが美しい独裁以上の何かだと言えるのは、なぜでしょうか。

練習5　好きになれない疑い

心理的に手放しがたい信念をひとつ選んでください。宗教的な考えかもしれませんし、政治的な立場、自分自身についてのイメージ、あるいはこの本のなかの主張かもしれません。それに対するもっとも強力な反論を書いてください――あざけることなく、反対の見方をわざと弱めることもなく。想像上の論敵に頼んで、あなたの要約を、相手が公正だと認めるまで直してもらいましょう。

そのうえで、どんな観察が得られれば、その信念を見直すのに十分な根拠だと認めるのかを、言葉にしてください。どんな条件のもとでもそのような観察がありえないのなら、自分の立場を正直に、信仰、道徳的な選択、あるいは個人的な誓約と呼んでください――ただし、検証された知識とは呼ばずに。

開かれたままの十二の問い

1. 善が宇宙の物理的な性質ではないとしても、それは意識と意識のあいだの関係がもつ、客観的な性質ではありうるだろうか。
2. 必要な変容と正当化された残酷さとは、何によって分かたれるのか。前者は後者なしに可能だろうか。
3. 創られたものは創り手なしには存在しなかった――ただそれだけの理由で、創り手は創られたものに対する権利をもつべきなのだろうか。
4. 意識の道徳的地位は、それが存在する期間の長さに左右されうるだろうか。
5. あらゆる「私」がひとつの源の現れであるとしたら、そのことは互いを気づかう義務を強めるのか、それとも弱めるのか。
6. その内容を確かめる独立した手段がないとすれば、悟りは心理的な確信とどこが違うのだろうか。
7. 霊的な師への有益な信頼はどこで終わり、自分の責任をその師に明け渡すことはどこから始まるのか。
8. 勝つ力や服従させる力によっては測られない、道徳的な強さというものはあるだろうか。
9. 自律した創造者を創る能力は、非の打ちどころなく従順なシステムを創る能力よりも高いものなのだろうか。
10. 完全な自由がありながら、防ぎうる苦しみの極端なかたちをもたない世界は可能だろうか。
11. 創造者たちがネットワークをなしているとしたら、至高の裁き手なしに、どんなルールが彼らのあいだの争いを収めうるだろうか。

12. いつかあなたと意見を違えるとわかっていても、あなたは自分の創造物に、どんな自由を贈るつもりがあるだろうか。

創造者のための個人倫理の草稿

この文章には異を唱えることも、書きなおすこともできる。誓いとしてではなく、自分自身の原則を言葉にしていくための出発点として書かれている。

私は、自分の知識に限界があることを認める。だから、内なる声も、他人の啓示も、自分の成功も、自分が絶対に正しいことの証拠にはしない。

私は、できることと権利があることとを区別する。私に何かができるということは、まだ、私にそれをする権利があることを意味しない。あるシステムを創ったからといって、その参加者たちが私の所有物になるわけではない。

私は、取り返しのつかない決定よりも先に、取り返しのつく決定を探す。とりわけ、誤りの代価を払うのが私ではなく他者であるときには。

私は、他者の自律を、考慮に入れなければならない価値とみなす。それは私の構想を制約するかもしれない。だが、まさにそれが存在することによって、創造物は私の意志の延長以上のものになる。

私は、自分の考えを見直す余地を残しておく。いつか事実が私の宇宙論を覆したとしても、それといっしょに良心まで捨てずにすむように。

最後のページ　未完の地図

机の上には一枚の紙が残っている。そこには、宇宙の最終的な図は描かれていない。片隅にはアルジュナの戦車。もう一方の隅には、夕暮れどき、ひとりの人が神という考えと言い争っていた窓の四角。そのあいだに、庭、工房、目に見えない生命、設計図の上の世界、信じたくなる声、そして答えたくない問いがある。

そのすべての上に、ピラミッドを描くこともできる。あるいはネットワークを。あるいは紙を白いまま残し、いまのところ私たちは自分の考えのほかには何も知らないのだと認めることもできる。けれども、ひとつの区別だけは、すでに見落としがたい。創ることと所有すること、信じることと服従すること、変容させることと苦しめることは、同じではない。

この本に何かしらの成果があったとすれば、それは出来合いの真理を手渡したことにではなく、権力をあまりにたやすく正当化する理屈を、いくらか一筋縄ではいかないものにしたことにあるだろう。さしあたりは、それで足りるのだろう。もしかすると創造者の道は、ある者がはじめて自分自身にこう問いかけるところから始まるのかもしれない。「私が手を加えたことで、何がより自由になるのだろうか」。

著者について

マクシム・ステパネンコは起業家であり、Innova Consulting Group のマネージング・パートナーを務める。職業上の関心は、法、起業、新しいテクノロジーの交わるところにある。『創造者』は、良心と自由と責任をめぐる個人的な思索から生まれた。

奥付

日本語版初版 · カナダ、オタワ · 2026

ロシア語からの翻訳。原題：『Творец. По ту сторону повиновения』（2026年）。

構想と哲学的な問いの設定：マクシム・ステパネンコ。原書の文章およびこの日本語訳は、人工知能ツールの助けを借りて作成された。

© 2026 マクシム・ステパネンコ。無断転載・複製を禁ず。